

## 第 42 年度（2026 年度）ソフトウェア品質管理研究会 分科会紹介

「メトリクス・データ分析を「重荷」から「武器」へ」

メトリクス演習コース主査の柏原です。

2026 年度のメトリクス演習コースも、以下のメンバーで皆さんの学びをサポートします。

主査：柏原一雄

副主査：小池利和

アドバイザー：小室睦

### ■ あなたの現場が、知らず知らず陥っている「罠」

本コースのアドバイザー・小室睦氏の SPI Japan 2020 での発表「データ分析の光と影」では、データ分析を破壊する 7 つの方法（アンチパターン）があることが示されています。

いくつかのアンチパターンを紹介します。皆さんの組織でも、罠にはまっていますか？メトリクス・データ分析が重荷になっていませんか？

- ・データを責任追及に使う：悪い数値を出すと叱責されるのを恐れ、現場が本当のことを隠してしまうことで、報告が「形」だけになり、改善の機会が失われる状況です。
- ・書き込み専用データベースを構築する：「将来使うかも」とデータを集めさせるが、結局何にも使われない。活用されない収集作業だけが永遠に続く状況です。
- ・数字（結果）だけで判断する：現場のプロセスを見ず、よいプロセスとは何かも考えずに、相関係数などの数値だけで良し悪しを決めつけ、改善に繋がらない不適切な判断を下してしまう状況です。
- ・他社、他組織の結果を形式的にマネする：他社の事例や標準値を鵜呑みにして、形だけマネをして失敗する状況です。

こうした「罠」から抜け出そうとしても、「何が問題かわからない」「何から手を付けたらいいかわからない」「どうしたらいいかわからない」といった「壁」を感じていないでしょうか？

本コースでは、「壁」を乗り越えるために必要となる力を養っていただくことが可能です。

### ■ 「壁」を乗り越えるために必要となる力

現在は、生成 AI がデータ分析を代替できる時代になってきました。

しかし、データ分析は、「1. 問題の定義→2. データの測定・分析計画→3. データの収集→4. データの分析→5. アクション」の 5 つのステップからなる品質データ分析のプロセスの一部です。

また、生成 AI によるデータ分析結果の妥当性を確認する力も必要になると考えています。

本コースのカリキュラム

(<https://www.juse.or.jp/sqip/workshop/outline/index.html#enshu2>) により、「壁」を乗り越えるため必要となる幅広い力を身に着けていただくことが可能です。

## ■ 研究員たちが、現場の課題を乗り越えた証言

メトリクス演習コースに参加した多くの研究員の皆さんが、確実にスキルをつけ、確かな変化を実感しています。

過去3年間、研究員の皆さんからは、以下のような証言をいただいています。

「データ取得の重要性をチーム内で共有し、工数や欠陥データについて、開発メンバーにとって入力負担の少ない収集方法を検討できた」

「単に実績データを並べて説明するより、問題構造図を用いて現場が抱える課題のメカニズムから仮説を立てて分析・説明するほうが、周囲の納得感が断然高いと実感した」

「自分の業務データに泥臭く向き合うことで、統計手法をどう活用すべきかというあやふやだったイメージが、実践レポートとして形になり、自部署の課題解決を前に進められた」

「メトリクスの胡散臭さを解消する魔法のような手法を期待していたが、まずは測定の目的を明確にして、不完全なデータからでも地道に分析を始めてみることの大切さを知った」

「統計学は難しそうと長年敬遠していたが、サンプルデータを使って実際に手を動かす演習を通じて、実業務でどう活用すればいいのか具体的に想像できるようになった」

## ■ あなたを支える指導陣の想い

小室陸より：

データ分析の各種技法の使い方・意図・コツ・留意点などを、プロセス改善や品質管理にどう使うのかを意識しながら伝えたいと思います。

(参考：データ分析パターン言語

<https://www.juse.jp/sqip/library/shousai/?id=S2024-7Fee>)

小池利和より：

スキルを自分のものにするには、input, output, practice の繰り返しによる鍛錬が不可欠です。この3つは以下のようなことを指します。

input：スキル習得のための知識を覚える

output：覚えたことが出来るようになるための反復練習

practice：実際の適用場面でスキルを活用できるように実践する

本コースでは、まさに上記を組み合わせて、使えるスキルを習得して頂きます。メトリクス活用を検討している方は是非ご参加ください。

柏原一雄より：

実は、私は本コースの「1期生」でもあります。受講前の私は、統計やデータ分析に関する知識はまったく持っていませんでした。

しかし、1年間の活動を通じて、現場でメトリクスを活用するために必要な知識を十分に得ることができました。安心して参加してください。

通常の講義・演習だけでなく、事例や考え交換する「アフター活動」、わかるまで支援する「個別指導」も、皆さんの学びを強力に支えてくれるはずです。

■ 最後に

1年間一緒に愉しく学び、皆さんが直面している壁を乗り越えましょう。皆さんがはまっている罫を抜け出しましょう。

そして、メトリクス・データ分析を、報告のための「重荷」から、現場を動かす「武器」にしましょう。皆さまのご参加を、お待ちしております！